

高校生の自己愛と主張性との関連

——不登校経験者に着目して——

19012FRM 山田 夢

Ⅰ. 問題と目的

不登校経験者は一般生徒よりも高校生活に不満足感を持つ割合や高校卒業後の社会適応に困難を感じる割合が高く、支援が必要であることが明らかとなっている(金子・伊藤, 2018)。近年、青年期においては自己愛が不登校に関連する人格特性として注目され(例えば塚田・幸田, 2015)、また、アサーションスキルが高校生の不登校予防に有効な標的スキルであることが示唆されている(大対, 2011)。また、渡部(2009, 2010)は高校生において主張性が高い人ほど友人関係の適応が良好であること、特に「率直な表現」と「情動制御」は、得点が高いほど対人場面での問題や対人不安が低いこと、過剰な「他者配慮」が不適応につながることを示唆した。

以上より、不登校や学校適応に関連のある自己愛傾向や主張性、友人関係に着目した先行研究は多々あるが、その中でも不登校経験者に着目した研究はない。したがって、本研究では不登校経験者が多く在籍する高等学校の生徒を対象に、研究1では不登校に関連する変数である、自己愛と主張性との関連を検討することを目的とする。さらに、研究2では、研究1で見出された自己愛のタイプによって不登校経験や現在の学校生活、「友人関係」での主張性に違いは見られるのかを検討することを目的とする。

Ⅱ. 研究1

1. 目的

研究1では高校生を対象に、自己愛により対象者を分類し、各群の主張性の特徴を検討することを目的とする。渡部(2009, 2010)を踏まえ、適応的と考えられる「誇大型」の側面を持つ場合、主張性の「主体性」、「率直な表現」、「情動制御」、「他者配慮」が高くなる(仮説1)。「過敏型」の側面もしくは「低自己愛型」の側面を持つ場合、

主張性の「主体性」、「率直な表現」、「情動制御」が低く、「他者配慮」最も高くなる(仮説2, 3)。

2. 方法

調査対象者：X 県の高校生 125 名(1 年生 43 名, 2 年生 40 名, 3 年生 42 名)。

手続き：2020 年 7 月に、Web 調査を行った。

調査内容：①小塩(1998, 1999)の自己愛人格目録短縮版(NPI-S) 30 項目, 5 件法, ②清水・石津(2018)の修正版主張性の 4 要件尺度 33 項目, 5 件法, ③過去の不登校経験について, ④フェイスシート, ⑤面接調査の依頼, ⑥アンケート調査に対する感想で構成された。

3. 結果と考察

各尺度の因子分析を行った結果、NPI-S では 3 因子が、修正版主張性の 4 要件尺度では 4 因子が抽出された。NPI-S の 3 下位尺度得点を標準化し、Ward 法による階層的クラスタ分析を行い、3 クラスタを抽出した。3 下位尺度全てが高い「高自己愛混合型」、「優越感・有能感」、「自己主張性」が高い「誇大型」、3 下位尺度全てが低い「低自己愛型」と命名した。「過敏型」は認められなかったため、仮説 2 は検証することができなかった。

各クラスタを独立変数、主張性尺度の各下位尺度得点を従属変数とする 1 要因参加者間分散分析を実施した結果、「率直な表現・主体性」、「自己制御」において、クラスタの主効果が認められた(率直な表現・主体性： $F(2, 122) = 11.39, p < .001$, 自己制御： $F(2, 122) = 4.57, p < .05$)。Tukey 法を用いた多重比較の結果、「率直な表現・主体性」は「高自己愛混合型」で最も得点が高く、次いで「誇大型」、「低自己愛型」となった。「自己制御」は、「低自己愛型」で最も得点が低く、「高自己愛混合型」と「誇大型」間では有意差が見られなかった。これは、渡部(2009, 2010)同様、自分の考えや感情を率直に表現し、感情を制

御することが個人の適応感を高めると言える。よって、「高自己愛混合型」が最も適応的であり、適応的な側面である誇大性によって適応的でない過敏性の側面をカバーしていることが考えられる(中山・中谷, 2006)。また、江口・濱口(2012)は、他者配慮と自己表明の両方を多く行うことで内的適応感が高まることを示唆しており、今回の結果で「率直な表現・主体性」が最も低かった「低自己愛型」は「他者配慮」のみを多く行っている可能性が考えられ、適応が低いと考えられる。以上より、高校生の学校適応には、人格特性として自己肯定的な感覚や自信獲得と関連がある自己愛傾向の高さが1つの要因と考えられ(檜皮・浅川・古川, 2003)、さらに、日常的に自分の感情を制御しながら自分の意見や感情を主張できることが求められるだろう。

III. 研究2

1. 目的

研究1で得られた各クラスタの不登校経験および不登校経験後から現在の学校生活に至るまでのプロセスの違いを面接調査にて明らかにすることを目的とする。さらに、学校適応要因の友人関係での主張性の違いも検討する。

2. 方法

調査対象者：研究1で得られた各クラスタから2～6名を選抜し、不登校経験者11名(男性6名、女性5名)を分析対象とした。

手続き：アプリケーションソフトのZoomを用いた、オンラインでの半構造化面接を行った。

調査内容：質問項目は、大きく不登校経験、友人関係の2つに分け、7つの質問項目を用いて調査した。面接調査は、文書及び口頭による同意を得た上で、倫理的配慮のもと行われた。

分析方法：分析方法には複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model; 以下、TEM)を採用した。語られた経験や心境を意味のまとまりごとに切片化し、ラベリングを行った。それらを時間軸に沿って並べ、11人に全体のTEM図を作成した。

3. 結果と考察

不登校経験において、「高自己愛混合型」では

「人目が気になる」、「誇大型」では、「できない自分への思い」、「低自己愛型」では「学校や他者に対する恐怖」を感じていたことが明らかとなった。また、「支援室・保健室登校の利用」、「他機関の利用」、「休んでいる間に遊べる友達の存在」は、学校復帰につながり、八尋(2016)同様、これらは学校復帰に関する重要な視点であると考えられる。そして、高校入学後の学校復帰および高校生活での登校維持要因には、各クラスタで大きな差は見られなかったが、自己愛傾向の高い者は、自己愛の傷つきが回復・回避される環境によって学校復帰を果たすことができると推測される。そして、不登校経験者は、高校入学後の「環境の変化」を経て、「友達や先生の実在」、「不登校の子の実在」、「義務感・大学進学目標」が登校維持を支えていると考えられた。

また、どのクラスタも、不登校時は「人に合わせる・人の顔色をうかがう友人関係」を築いていた者が多かったが、高校では「自分の意見を言える・素でいられる友人関係」、「悩みを相談できる友人関係」へと変化した。これより、高校生活では、不登校時よりも率直な表現ができる友人関係の形成が可能となり、そういった友人と過ごす中で自己制御を身につけていると示唆された。

IV. 総合考察

学校生活において、「高自己愛混合型」は、自己に対する否定的な他者評価に過敏であり、また、「誇大型」は、誇大化した自己とは異なるできない自分に直面すると自分を制御することが難しく、どちらも自己愛の傷つきが不登校の要因となることが考えられた。しかし、両クラスタとも、現在のような自分に合った学校生活や友人の実在によって自己愛が回復し、自己表現や自己制御が上手くできていることが考えられる。一方で、「低自己愛型」は、学校生活の対人関係や環境に恐怖を抱きやすく、自己愛の他に対人恐怖や社会恐怖、過剰適応といった問題が考えられた。そのため、率直な表現や主体性、自己制御の獲得は他クラスタよりも低く、適応には、自分に合った環境や友人の実在とともに、そういった環境から得られる安心感の獲得が重要であると考えられた。